

「第19回庭野平和賞」 総裁あいさつ

本日は、「第19回庭野平和賞」の贈呈式に当り、
駐日メキシコ大使、カルロス・デ・イカサ 様
駐日バチカン大使、アムプロゼ・ビー・デ・パオリ 様
文部科学省 事務次官、小野 元之 様
日本宗教連盟 理事長、新田 邦夫 様

をはじめ多くのご来賓のご臨席を賜わり、心より感謝申し上げます。

この式典に、メキシコのサミュエル・ルイス・ガルシア名誉司教さまをお招きし、「庭野平和賞」を贈呈させていただきましたことを光栄に存じます。

すでにご紹介がありましたとおり、ルイス師は、三十五歳から四十年にわたりメキシコのチアパス州でカトリックの司教を勤められ、その間、メキシコおよび中南米地域での人権擁護活動にかかわり、とくに政治的・経済的・社会的な抑圧を受けつづけてきた先住の人びとに光を当て、その地位向上、文化復興に取り組んでこられ、人々の信頼と敬愛を集めておられます。

私は宗教者の一人として、ルイス師の人柄と取り組みに称賛の言葉をお贈りするとともに、その取り組みは大変示唆に満ちたものであり、かつ共感を覚えるのであります。

世界の人類が直面している課題を解決するには、政治的・経済的・社会的なアプローチが必要であることは言うまでもありません。しかし、その一方で、問題の根本的な解決のためには、一般世間の価値観を超えた宗教的価値観、言葉を変えれば「宗教の智慧」が必要であり、それに基づいたアプローチが大きな役割を果たすと思うのです。

すべてのいのちは、等しく尊いものです。人間のみならず、生きとし生けるものはすべて尊いのちを生きているのです。

しかし、現実社会の出来事を見ますと、いのちの尊さが十分に認識されていないと言わざるを得ないのであります。

貧富の差も男女の差も、また人種の違いなどの外的条件に違いはあっても、「人間の価値」は平等であり、みな等しく尊いのちを生きているのです。

この「いのちの尊厳」に根差すものこそ「宗教の智慧」であり、その「いのちの尊厳」を見失うことなく歩んで行くとき、人類の課題は、真の解決に向かうのです。

ルイス師の取り組みがこうした「宗教の智慧」を根底にしたものであることは、多くの方が認めるところでありましょう。

ルイス師はまた、共同体を築くうえでの重要なこととして、聖書の教え「自分の道だけを探している限り道は見つからない。しかし他の人の道も同じく探すと道は見つかるであろう」を

引用され、他者を愛すること、辛抱強く、注意深く歴史の進展を見守ることの大切さを述べておられます。

この聖書の教えに接して、私は、仏教の「自ら渡ることを得ざるに 先ず他を渡す」という教えと、宮沢賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉を思い浮かべ、そこにあい通じるものを感じるのであります。

それらは、仏教の「利他心」、つまり「他者を先に渡すことが自分の救いである」という教えであり、共同体を築く上で重要であるばかりでなく、人間としていかなる時も大事にしなければならない教えであり、精神であると思っております。

ルイス師が司教として着任された当時、チアパス州の先住の人びとは、五百年余にわたる抑圧、差別、貧困で苦しんでおりました。

ルイス師は、そうした劣悪の状況におかれた人びとの中に身を置き、神の意思に沿って、人びとの声に耳を傾け、人びとに寄り添われたのです。だからこそ、深い信頼と敬愛を込めて「貧しい人々の司教」と呼ばれるのです。

神仏は常に、私たちに寄り添ってくださっています。そのことをよく自覚して、私たちは素直に、神仏の声を聞き、神仏に寄り添っていくことが大事であると思っております。

貧しさや豊かさにかかわりなく、いかなる環境条件下にあっても、私たちは人生の意義を見出していくことが大切であります。ルイス師は、神に寄り添い、人びとに寄り添って、感謝と利他心という宗教的価値観——「宗教の智慧」によって「生きがい」「希望」を与え、それが苦難を超えていく大きな力になったことを、その取り組みから教えて下さっているように思います。

どうか、これからもルイス師の「宗教の智慧」による取り組みが多くの人に受け継がれ、豊かな実りが得られますよう、そして、この「庭野平和賞」が、メキシコ・チアパス州の人びとへの励ましともなることを願い、「第十九回庭野平和賞」をサミュエル・ルイス・ガルシア名誉司教さまに贈呈できますことを神仏に感謝申しあげ、お祝いの言葉とさせていただきます。

ありがとうございました。

二〇〇二年五月九日

庭野平和財団 総裁

庭野日鑛